



馬耳東風

やおら上腕まで袖をまくりあげ、蚊を寄せ付けぐいぐい腹いっぱい血を吸わせた。頃合^{ちかあひ}を見計らって掛け声をあげて一気に力んだ。蚊は血飛沫^{ちしぶき}を上げて爆死した。東京でひと昔前の学生の実験だ。間も無く列島で蚊が動きはじめる。蚊は生活の中で当たり前^{あたりまえ}の存在だった。蚊遣り^{かや}（煙で追い払う）、蚊取り線香と共に蚊帳^{かや}は、生活上の必需品で四隅を吊り下げ寝床を覆う。麻などで透かして織ったものだ。人の生活と蚊の存在は当たり前として、昨年の猛暑は発生を抑えたようだ。日本に多いヤブカをはじめとしてフィラリア感染症は、ペット診療の要であった。また、アフリカでマラリア感染症の防圧に貢献した獣医師・堤可厚^{つみ よしあつ}博士の功績が思い出される。蚊による感染症の防圧は、公衆衛生上の大きな課題であった。飛来する飛行機内での駆除や公園内での駆除等や水たまりを造らない排水構造が進化した。一方、水気を多く含む竹林は、ヤブカの生息圏として里山や公園に存在する。

タケは真っすぐに育つ成長の早い植物で、地下茎があり節々に成長点を持ち、雨後の竹の子はあっという間に良く育つ。その姿の見事さに驚く。多く分布するモウソウのそれは数あるタケの王者だ。目通り稈周40 cmを超え、稈の高さ20 mを超す巨体に変身する。今頃は竹の子の収穫期でさまざまな姿で食卓を飾っていることだろう。里山ではイノシシと先取りを競う場面も多い。イノシシは発芽前にその鼻で見事に掘り起こす。深さは40 cmもある。竹林といえばスズメのお宿として民話の材料であり、竹取物語は現存する最古の作り話として親

しまれている。懐かしく楽しい思い出の物語だ。竹林で有名な嵯峨野のモウソウアーチの400 mに及ぶシルエットは、「竹林の小径」として名を馳せ観光地のシンボルである。夏は涼しく、木漏れ日の林を風が通りぬけ、葉の擦れる音に癒され、雪が降るとその化粧はまさに圧巻だ。

欠点といえば夏の蚊の発生は、いかにも竹林の欠点だろう。いわゆる竹藪^{たけくさ}といえばウグイスやコジュケイなど鳥類の繁殖地として選ばれる。東京目黒区の「スズメのお宿緑地公園」や世田谷区の「蘆花公園」と「竹山緑地」は市民に親しまれ、夕方のスズメの鳴き声がにぎやかなはずだ。京都の地藏院や鎌倉の報国寺あるいは埼玉県飯能の竹寺は、境内に竹林を持ち寺の代名詞にもなっている。山中にボツンと一軒家の神仏習合の医王山竹寺は、竹製の器に仕立てた精進料理に独特の風情がある。竹の御所流精進料理で知られる東京小金井の尼寺三光院の庭は、竹林を備え和の持つ侘びや寂の風情を演出している。モウソウ、マダケ、ハチクなどがよく手入れされている。かつて竹林は、河川や山林崖線の地崩れを防止する機能や竹細工の用材としての用途が主流であった。里山や里地で見かけるその生命体の持つ不思議な生態が、ようやく科学的な研究対象になった。ヤブカに刺されながらの開花研究が、若い女性研究者の久本洋子東京大学助教（分子生態学）の手で進められている。モウソウが開花すると枯死し67年周期で繰り返す。マダケとハチクの開花は120周年とされ、世代を超えた実に長期の研究に取り組んでいる。今や放置竹林は景観や植栽林の侵蝕破壊を招き、その繁殖力の拡大が懸念されてきた。嫌われものの蚊に刺されながら、竹類の開花制御研究に長い目で取り組む生き方に共感し感激した。（柏）